

- 1、「はじめに」
- 2、「野菜栽培にあたって」・・・野菜の見に成って考える。謙虚になる。
- 3、「有機農業について」・・・現在の農法への変遷。知識と技術と覚悟が必要。
- 4、「上手に作るコツ」・・・先ずは栽培環境の整備を行なう。
- 5、「夏野菜の管理と収穫」

高温乾燥が続くので、余分な枝や葉は適宜剪去し通風採光を図り蒸れないようにする。
 支柱への誘引をしっかりとしておき突然の大雨、突風で樹が傷まないよう手当とする。
 株元は乾燥防止と地温上昇による根の弱りを回避するため敷きわらなどを行なう。
 病虫害の防除については、1週間程度の間隔を置いて2~3回散布を行なうことが効果的である。
 果菜類の施肥では、開花前では肥料が多すぎるとボケて葉だけ大きくなりいい果実ができません。
 逆に、開花後は定期的な施肥(追肥)がないと良い花が咲かず草勢も落ちることになります。
 萎れる、枯れる要因・・・根の傷み、土壌病害、着果過多などによる。

品目別管理

トマト、キュウリは通常7月一杯で終わります。収穫終盤になってきたら摘芯と整枝を行なうと果実の太りが良くなり、収穫切り上げのめどもつき易くなる。

ナスは10月後半まで収穫可能ですが、秋に良い果実を収穫するために、基本的には7月下旬に切り戻し剪定を行い樹を休めます。

イモ類は元肥主体ですが、生育が思わしくない場合はそさい3号の追肥を行います。施用量は坪当たり50g程度とし、7月中の施用とします。

スイカは収穫期間に入ってきます。収穫の目安は開花後45日経った頃で、スイカが卵大のサイズになってからは38~40日後位です。着果日が不明な場合は、目安ですが、成り首に最も近い巻きヒゲの枯れ上りを確認して試し取りし判断します。マクワウリは収穫期に入ってくると、果皮面がレモンイエローからオレンジがかった濃い黄色に変わってきます。銀線マクワの場合は縦縞の部分から青みが抜けて完全に白くなります。

西洋カボチャは着果から50日程度が目安となります。収穫期になると果梗部が緑色から褐色に変化してゆきます。概ね褐色部分が三分の二以上となってきた頃です。



「秋野菜の準備」

野菜の播種はキャベツ、ブロッコリーで7月20日過ぎから、白菜は8月上旬から、レタスはお盆前後から、ダイコンなどの播種は8月25日から9月10日頃の降雨後からとなります。その他、ニンジンの年内取りは7月一杯まで、秋ジャガは8月終わりから9月始め、インゲン、ササゲはお盆まで、タマネギの播種は9月中旬、春キャベツ、ニンニク、ソラマメ、イチゴは10月10日頃を播種・定植の目安とします。ホーレンソウ、

コマツナ、シュンギクなどの葉物やコカブは9月中旬以降、10月中旬までいつでも播種できます。

圃場環境の整備

連作障害に注意しましょう。特にアブラナ科野菜の根コブ病がみられた圃場では数年間はアブラナ科野菜の植え付けをしないようにします。(アブラナ科野菜・・・ダイコン・ハクサイ・キャベツ・ブロッコリー・コマツナ・カブ・ミズナ・チンゲンサイなど)また、秋雨や台風シーズンとなるので、畝たてを十分に行なうと共に、排水がスムーズに行くよう段取りして下さい。

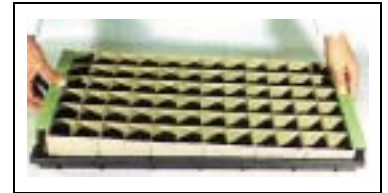
播種・育苗方法

育苗するものは、箱まきか地床育苗が無難ですが、ポットを利用する場合は7.5cm 鉢以上のものをお勧めします(最低でも6cm 鉢)。土の量が少ないほど乾燥し易いので管理が大変です。従って春に使うセルトレイは、管理が難しいので使わないでおきましょう。

播種用土は「種まき培土」が無難です。鉢上げ用培土は手短に調整するなら「与作」1：「山土または田土」1：モミガラ(又はクンタン)0.2~0.3で混合して使用します。自家調製ならピートモス1：床土1：モミガラ(又はクンタン)0.2~0.3に「そさい3号」と「セルカ」をそれぞれ300g混入し土がしっとりする位の水を与えて十分混合します。

ペーパーポット・ポリポットなどに、土を8分目ほど入れ、覆土は5mm程度までとします。播種後、勢い良く灌水するとタネが浮いてきてしまうので注意します。

播種後水分の安定を図るため、新聞紙などを掛けておく。直射日光は避け、寒冷紗やヨシズなどでやや遮光して温度が上がらないよう、また大粒の雨でたたかれない様に管理してください。



発芽後の管理

48時間経過後から発芽の確認を行う。2~3割程度初がが確認できたら、新聞紙を取り除き日光に当てます。日差しも強いので幼苗期には日中の直射日光は当たらないようにしますが、遮光をしすぎると軟弱徒長苗と成り定植後に生育が遅れたり枯れやすくなります。灌水は気温の低い朝のうちにに行います。夕方遅くやると夜間に苗が伸び軟弱な苗になり易くなります。播種後約3週間で本葉3~4枚、約1ヶ月後で本葉5~6枚の定植苗になります。育苗中はアオムシ、ナメクジの食害に注意する。

本圃の準備

畑には石灰を施し(施肥の1週間前)、堆肥や「あさひ」など化成肥料を10m²あたり1.5kg程度施し、良く耕して整地しておきます(秋野菜の元肥はあさひ、有機化成A801、固形30号が主体です。有機化成A801、固形30号を使用する場合は2kgは施用して下さい)。なお、ダイコンなど根菜類には「BMようりん」などりん酸質肥料を混用しましょう。

葉菜類は、生育期間が短いため元肥中心で速効性のものを使用して生育前半に草勢を強くすれば追肥は少なくとも育ちやすくなります。根菜類も、葉菜類と同様に元肥中心で、地上部がある程度大きくなれば自然と地下部も大きくなります。

ダイコンの場合、播種日近くになって、油粕など有機質肥料や堆肥、鶏糞などを施用するとダイコンの肌が荒れたり又根発生の原因となります。これらの肥料を施用する場合は肥料的なもので坪あたり1kg前後、堆肥的な物で2~5kg程度とし、遅くとも一ヶ月以上前に施用し耕耘しておかなければなりません。なお、化成肥料や有機化成肥料は播種予定の1週間前までに施用します。

マルチングは雑草防止と水分の安定、肥料の流亡防止、泥の跳ね上げ防止の効果がある。面倒でもマルチングはするようにしましょう。

定植

定植は晴天日は夕方から定植を行うようにします。定植後の灌水は充分に行ってください。なお、定植間隔は秋野菜の場合1a(10m×10m)で約300本入るように計算します。

定植時の本葉はポット苗で5~6枚が適当である。定植前に薄い液肥(「そさい3号」の500倍液)を灌水代わりに与えておきます。植え付け時にはジェイエース粒剤(登録内容を確認すること)を土壌混和しておくことと初期の害虫被害を防ぐことができます。ただし間引き菜を食用にすることは出来ません。

間引きは種後10日目頃に3本に、20日目頃に1本にする。

強風や大雨時には風雨により地上部が揺すられ、茎や根が傷み生育に影響が出やすくなるので、株元が不安定な場合は土寄せを行なってください。また、風雨の後には、病害が発生しやすくなるので直ちに殺菌剤散布(ジマンダイセン、ダコニール1000、ボルドー剤など)を徹底して下さい。

追肥時期

秋野菜の追肥は基本的に2回行います。1回目は播種、定植後2週間目頃。2回目は白菜など結球する作物では結球始め、ブロッコリーなどは花蕾が見え始めた頃、大根などは1回目の施用後2週間目位で間引きを兼ねて行います。

施肥量は「そさい3号」で1株(本)当り5~10g程度で(大根は5g程度)、できれば除草を兼ねて土壌混和し土寄せします。マルチ栽培の場合は生育に問題が無ければ、1回目の追肥は行いません。

2回目はマルチの肩部分に施用します。追肥はそさい3号、5号を使用します。なお、施肥位置に注意し肥あたりを起こさないように注意する。



ハクサイの軟腐病

害虫防除剤	対象害虫				使用倍率 (1)	対象作物			
	アオムシ	コナガ	ヨトウムシ	アブラムシ		大根	白菜	キャベツ	ブロッコリー
ジェイエース水溶剤	○	○	○	○	1000~1500	○14	○14	○7	○14
ハクサップ水和剤	○	○	○	○	1000~2000	○35	○前	○前	○30
モスピラン水溶剤(2)	○	○		○	1000~4000	○14	○14	○7	○14
マラソン乳剤	○			○	1000~3000	○14	○前	○前	○3
エルサン乳剤	○	○	○	○	1000~2000	○30	○21	○14	○30
アフーム乳剤	○	○	○		1000~2000	○7	○7	○7	○7
アディオソ乳剤	○	○	○	○	2000	○30	○14	○3	○3

(1)使用倍率は作物によって違うので確認のうえ使用の事。

(2)大根のみ散布は1回まで。

対象作物欄の数字は収穫前日数を表す。(「○14」は収穫前14日まで。「○前」は収穫前日まで(24時間前まで)

病害防除剤	対象病害							使用倍率	対象作物			
	軟腐病	黒斑病	斑点細菌病	べと病	黒斑細菌病	白斑病	黒腐病		大根	白菜	キャベツ	ブロッコリー
Zボルドー	○		○	○	○		○	500	○無	○無	○無	○無
コサイドボルドー	○		○				○	1000	○無	○無	○無	○無
スターナ水和	○							1000	○21	○7	○7	○14
ダコニール1000		○		○		○		1000	○45	○7	○14	○21

対象作物欄の数字は収穫前日数を表す。(○無は規制なし)